CODE VEIN ―Another queen―

リヴィ（Live）

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

《クイーン討伐戦》から数年。

吸血鬼達の争いが絶えない中、一人の少女がヴェインを駆ける。

――消したくても消えない炎を、胸に抱きながら。

目次

一話　激情を宿す少女 ―― 1
二話　重なる『姉』 ―― 6

一話　激情を宿す少女

◆❖◇◇❖◆

ある日、世界は突然、あるバケモノに覆い尽くされた。

そのバケモノはありとあらゆるものを喰らい、己がものとする人類を大きく上回る能力を持った高次元生物であり、食物連鎖の頂点から、人は叩き落とされた。

平穏だった日常は戻らぬものとなり、ただただ、逃げて逃げて、無様に地に這いつくばる日々。

追い詰められた人類は、各々で対抗策を練り出し始めた。

そのうちの一つ――――ゾンビのように甦った人の体から摘出された特殊な寄生体を使い、過去に死んだ者たちを蘇らせ、戦士として使役する方法が発案された。

『ＢＯＲ寄生体』と命名されたそれは、心臓を核として人に寄生させることにより、圧倒的な再生能力と肉体性能を持ち合わす不死身の戦士、吸血鬼（レヴナント）を生み出すことの出来る唯一の対抗策であった。

しかし、同時に致命的な弱点もあった。

吸血鬼という名の通り、吸血鬼として蘇った者たちは、血に対する異常な渇望があった。その血の乾きが限界に達した時、心臓に寄生したＢＯＲ寄生体が暴走して自我が崩壊し、核である心臓を破壊されても死なない堕鬼（ロスト）となってしまう。

そこで、吸血鬼の弱点である血の渇きに対する研究が始まった。

バケモノの観察、ＢＯＲ寄生体の研究が進み、血の渇きの克服の道は発見された。

完璧な吸血鬼を創り出す計画。そして、人類を更なる絶望のどん底へと叩き落とした最悪の計画。

――――《Ｑ．Ｕ．Ｅ．Ｅ．Ｎ計画》。

血の渇きを克服し、かつ従来の吸血鬼を大きく超える能力を誇る最強の吸血鬼を生み出す計画は、失敗に終わった。

《クイーン》は最終実験の反動に耐えきれず暴走。バケモノだけではなく、人類にさえ牙を向き、同胞たる吸血鬼さえも何千、何万と手に

かけた。
政府は緊急に大量の吸血鬼を量産し、暴走した《クイーン》の討伐が行われた。《クイーン討伐戦》の犠牲は何十万をも超える吸血鬼の犠牲と堕鬼を生む結果になったが、結果的には《クイーン》は討伐された。
しかし、問題は終わることなく、《クイーン》亡き後もその力は人類を脅かし続けた。
大量生産され、蘇った吸血鬼達は血の渇きを潤す結晶、『血涙』を求め闘争が始まった。更には《クイーン》が放った血の渇きを更に強くさせてしまう瘴気の存在が、その闘争を激しくさせた。戦いによって堕鬼となった吸血鬼達は数知れない。
しかし、血涙とて無限ではない。血涙を生み出す『血涙の泉』は、吸血鬼達の過度な採集により枯れていき、徐々に数を減らしていった。《クイーン》討伐後に創設された臨時総督府による血税――血涙や人血の提供――も限界を迎え始めていた。
また、ＢＯＲ寄生体を寄生され、吸血鬼として目覚めるまで個人差があることも相まって、討伐後に目覚めた吸血鬼達による反臨時総督府勢力も各地で見え始めていた。

世界が暗闇の一途を辿る中――一人の少女は、激情を胸に崩壊した世界を駆け抜ける。
姉を犠牲にした者達と、父と――世界への憎悪を宿して。

◆❖◇◇❖◆

「はぁ…はぁ…な、なんだコイツは…!!」
とある市街地。荒れ果てたビル街を、一人の吸血鬼は逃げていた。
その男の吸血牙装――血を吸うための武器――は破壊され、武器も使い物にならない。残っているのは、この瘴気から唯一守ってくれる瘴気マスクだけ。
「こんなに堕鬼がいるなんて…仲間も言ってなかったのに…くそ!」
逃げる男を追うのは、武装したかつての仲間の堕鬼達。その目に理

性はなく、ただ目の前の男を殺そうと駆け足で追いかけてくる。
死にたくない。そんな思いで男はひたすら走る。
「なっ…壁…!?」
だが、現実はそんな思いを受け入れてはくれない。
がむしゃらに走った先は、逃げ場のない壁。逃げ場を失った男は顔を青く染め、ガタガタと震え始めた。
「あぁ…おしまいだ…あんな数じゃ…心臓を貫かれて終わりだ…生き返れない……死んじまう…あぁぁ…」
懺悔の暇もないと言わんばかりに、追いついた堕鬼達は男へ一直線に走った。そして、次々と堕鬼の持つ武器が男に振りかかろうとしていた時――
『ギィあぁ!?!?』
『あ〝あ〝ぁ…あ〝!』

その堕鬼達は、巨大な黒い手に薙ぎ払われた。
来るはずの痛みが来ない男は、ゆっくりと目を開けた。
「…ぁ…お、お前は……」
そこには、身を覆うほどのコートを羽織った白髪の少女が立っていた。後ろ姿しか見えていないが、男はその少女の姿に、否、腕に見覚えがあった。
本来コートで隠されていたであろうその両腕。顕になったその腕は、黒く、巨大。大人一人を丸々覆ってしまうほどの手の大きさ。そして、鋭く引き裂くような爪。
吸血牙装による武装ではない。本当の、生身の腕。
「――」
少女はその巨腕で荒々しく堕鬼を倒していく。巨腕から放たれる一撃必殺の攻撃と小柄な身体からなる身のこなしは、並の堕鬼では相手にならないほどの実力を有していることを示していた。
そして、あたりの堕鬼が沈黙した後――その巨腕で堕鬼の頭を掴み…。

グシャリッ、と喰らった。

「あぁ…やっぱり…お前は…ぁ…！」

その光景を見た男は、堕鬼に追い詰められていた時よりも遥かに恐怖に顔を染めた。

堕鬼をさっきのように喰い尽くした少女は、くるりと男の方を向き、瘴気マスクと荒々しく伸びた髪の毛の間から赤い眼光を輝かせた。

「《黒朱の――あ、ぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

そしてその男の頭は巨腕によって掴まれ――――同じように、喰われた。

「…」

少女はしばらく目を瞑り、何かを思い出すかのように顔をふせた。

しばらくして――――

「…血涙の泉の情報だけか。使えない」

そう吐き捨てるように少女は呟いた。

禍々しい瘴気を放つ巨腕は、身を覆うコートの中に縮むように入っていった。巨腕は完全にコートに隠れていて、見た目は完全に少女のそれになっていた。

「アイツらの情報…やっぱり臨時総督府に乗り込むしか…」

ブツブツと、呪詛のように呟きながら、少女はその場を去ろうとしたが、少女の目線の先には、別の人影があった。少女は足を止めて、その人影をじっと凝視した。

「…何をしに来たの。待っていてって言ったはずだけど」

「申し訳ありません……ディアナ様に寄り添うことが……使命なので……」

まるで感情が籠っていないような声で喋る、もう一人の女性は、白の美しい装飾が施された露出度の高い服と、茨をイメージしたような吸血牙装を羽織っていた。足も素足に近く、他の吸血鬼とは異様な様だった。

まるで呆れたように少女――ディアナは言った。

「貴女何なの？いきなり現れて、あたしに寄り添うことが使命とか…見覚え無さすぎて気持ち悪いわ」

「……申し訳ありません……」

「…まぁいいわ。邪魔をしなければ問題は無いしね。《吸血鬼狩り（ハンター）》には襲われなかった？」

「大丈夫です…」

それは暗に、『邪魔をすれば殺す』と言っているようなものでもあった。彼女――ディアナの瞳から放たれる静かな殺意が、それを物語っている。繋げて言った言葉も、この女性を気遣うものでもなく、心配するものでもない。ただの情報確認だけだ。

「ここから先に血涙の泉があるわ。着いてきなさい」

「はい…」

ディアナの言われるがままに、女性はディアナの後を着いていく。

陽の光に照らされる彼女の背中は、とても寂しいものであった。

彼女には、もう何も無い。

あるのは――大好きな姉を奪ったアイツらへの、憎悪だけなのだから。

二話　重なる『姉』

◆❖◇◇❖◆

崩壊したビル街を歩くディアナと女性は、先程男から得た血涙の泉の情報を元に、その場所へと向かっていた。うろつく堕鬼を喰らいながら、確実に一歩一歩進んでいく。

今や、赤い霧の牢獄に閉ざされたヴェインの地に、心から安らぐ場所などどこにもない。どこにいても堕鬼に襲われる危険性があり、《クイーン討伐戦》に大量発生した堕鬼や討伐後の闘争も相まって、今やそこらじゅうに堕鬼が徘徊している有様。

それもこれも――すべて、あの男が始めたことだ。あの男達のせいだ。

自分にもあの男と同じ血が流れていることに吐き気がする。あんな、自分の娘を――私の姉を犠牲に兵器を作ろうとし、結果失敗して大勢の犠牲を産んだ下衆なアイツの血が、私を生かしていることに。

「…ディアナ様」

「…！何」

「あれは、拠点でしょうか…？」

過去に思い出していると、白い女性が向こうを指さして言ってきた。

その方向を見てみれば、そこには文字通り、生活するためのテントや用品が無作法においてあった。拠点、というのには些か疑問ではあったが、同時に、探していた拠点と同じものでもあった。

「情報が一致する…あたりね」

「…人が…いないです…」

「……たしかに、無人ね」

拠点内に入ってみると、人気はなく、物が散乱していた。火はそのまま灯してあり、先程まで人がいたことは確か。かすかに人の匂いがするあたり、それは確実だろう。

「堕鬼に襲われたにしては、血の匂いはしない…」
「…出払った……のでしょうか…」
「…その可能性が高いわ。近くで堕鬼と戦ってるかもしれない。今のうちに血涙を確保するわよ」
「…はい…」
拠点から離れ、男から得た情報を頼りに、道を進み、洞窟の中へと入っていく。
岩場が多く、とても歩きずらい。こんな所で堕鬼や吸血鬼と当たれば苦戦することは確実だろう。見つかる前に、早くしなければと、ディアナは駆け足で血涙の泉へ向かっていく。

「あ…」
「……」
しかし、白い女性は不安定な岩場に足を取られ、バランスを崩してしまった。幸い壁があったからか倒れることは無かった。
ディアナは足を滑らせた的の女性の声を聞き逃さなかった。ディアナは女性の顔をじっと見て、言った。
「…気を付けなさい。遅れたら置いていくわ」
「は、はい…気をつけます…ディアナ様…」
恥ずかしかったのか、白い女性は顔を少し赤く染めて応えた。
ディアナはそれを確認すると、すぐに視線を戻して駆け足で岩場を駆け抜け始めた。
カッ、カッ――
ふとら遠くから、岩と靴の接触音が聞こえた。
「(足音――!)こっちよ」
「は、はい」
足音と判断したディアナは、白い女性の手を取り、近くの岩場に身を隠した。大きくなる足音は洞窟内で反響し、バラバラな足音からして複数人、しかも駆け足で動いていることがわかる。
ディアナは気配を殺し、静かに彼らの会話に耳をすました。

『クソ、あの女、どこに行きやがった！』
『まだ遠くには行っていない！全員で捕まえて血涙を取り返すんだ！』
『ちくしょう、あれが今月分のやつだってのに…あれがなかったら俺たちは……!!』
「(…血涙を奪われたのか。だから拠点がスッカラカンだったのね)」
　どうやら、ディアナ達以外にも血涙を求めて来た者達――ディアナはどちらかというとついで感覚――が居るらしい。
　今の時代珍しくない。血の渇きを抑えるために血涙を求めて同胞同士が争うこの時代で、保管していた血涙全てを奪われるなんてよくある事だ。
『泉は!?』
『ダメです、全部持ってかれてます！』
『クソ！手分けして探せ！あのメスガキ、絞め殺してやる!!』
「(――どうやら、泉の方もダメそうね。無駄足だったか)」
　話を聞く限り、盗っ人は泉の方からも血涙を取ったらしい。余程欲張りなのか、それとも後がないのかは知らないが、こっちも命がかかっている。泉の方は見逃すわけには行かない。ここまできたのだから、殺してでも奪わなければ。それほどまでに、血涙というのは貴重なのだ。
　そんなことを思っていると、男達は別行動で盗っ人を探し始めた。この場を離れたことを確認すると、ディアナはゆっくりと立ち上がった。
「盗っ人を探すわよ。殺してでも血涙を奪う」
「はい…仰せのままに」
「…コケないでよ」
「……はい」

念を押して、気をつけるように釘を押すディアナ。女性は再び顔を赤く染めて俯きながら返事をした。
大丈夫そうだと確認したディアナは、先程よりも早く岩場を駆け抜けた。
「(――洞窟の風通しや明かりからして、そんなに深くない。なら、盗っ人は表に出てる可能性が高いわね)…表に出るわよ」
「はい」
男達が散っていったうちの一人、出口へ向かっていった男をディアナは追った。やがて岩場は平地となり、陽の光が当たる開けた場所へと出た。
「(血の匂い……近い!)」
その場所は先程よりも血の匂いが濃かった。堕鬼のような穢れた血の匂いではない。純粋な吸血鬼の血の匂いだ。つまり、ここの拠点のうちの誰かが近くで負傷したか死んだ可能性がある。
血の匂いを頼りに、その場を進んでいくと――
「ディアナ様、あれは――」
女性が指さした。
その指先は――黒いコートと銃剣を携え、子供を連れた吸血鬼。その手には子供の手と血涙が入っていると思われる袋が握られている。
目当ての、盗っ人だ。
ディアナは地面を蹴り、盗っ人の方へと高速で駆けた。
女は地面を砕く音を聞いたのか、すぐさま銃剣をディアナに向けた。
「み　つ　け　た」
「っ――」

しかし、もはやディアナと女の距離はゼロ距離に等しい。このリーチでは銃剣の剣も届かない。
ディアナは隠していた禍々しい巨腕を振りかざした。この距離でこれを喰らえばタダでは済まない。
「!?」
「くっ――」
だが、その鉤爪を防いだのは、吸血牙装。しっぽのように伸びた針型の吸血牙装が鉤爪を防いだのだ。女はそのまま牙装を地面へと突き刺し、牙装を軸として飛び上がり、銃剣を数発、ディアナに向けて放った。
「甘いわッ!!」
「なっ――あぁッ!」
ディアナはもう片方の巨腕で弾を防ぎ、防がれていた片方の巨腕で女の吸血牙装を掴んで、女を思いっきり地面に叩き落とした。
数メートルはあろう高さから地面に叩き落とされれば、吸血鬼とて激痛であろう。しばらくは痛みで動けないはずだ。
ディアナは地に伏す女の目の前に、見下すように立った。
「くっ――《黒朱の喰鬼》が…なんでここに…」
「目的はあなたと同じよ。その血涙、奪いに来たわ」
ディアナは、女が持つその袋を持って言った。
女は、渡さないと言わんばかりにディアナを睨んでいる。
「別にいいわ。あんたの意思なんて関係ないもの。むしろ、そんな体で抵抗できると思ってるの?」
「ぐっ…ぅ…」
意思など関係ない。そう言ったディアナは女の手から袋を奪おうとするが、女の手には力が入っておりなかなか手を離さない。
痺れを切らしたのか、ディアナは――
「面倒ね…もう殺すわ」
「っ……!」
「さよな――――」
コツン――

鬱陶しくなったディアナは女の心臓を腕で貫こうとしたが、その瞬間…頭に、小石でも投げられたかのような軽い衝撃が走った。
視線を下してみて見れば、やはり小石だった。なら、誰が投げたか。
そういえば、子連れだったな――――と、その子供を見た。
「ミアから…離れろ……!!」
「!?ニコラ…!逃げて!」
「…」
ニコラ、という少年は、ディアナは睨んでいる。敵意を持って、こっちを見ている。
「…あんた達、姉弟?」
「そうよッ!お願い、ニコラだけは……!ぐっぅ…う!」
この時代に兄弟、姉妹というのは酷なものだ。
世代的にも両親を無くしたのだろう。幼い弟を抱えて守ってきたのがわかる。いや、わかってしまう。
「……姉、か」

『お姉ちゃん!絵本読んで!』
『ふふ、ディアナは甘えんぼねー、いいわ、お姉ちゃんが読んであげる』
『やったー!』

「――」
ディアナは静かに、その手を納めた。
「！ミア！」
「よかった…ニコラ…」
「そんなことよりミアだよ、大丈夫？」
ニコラはディアナがミアから手を引いたことを確認すると、すぐ様ミアの元に向かった。互いに手を取り合っている。
「…」
「っ……」
その光景を黙って見ているディアナを、ミアは殺気を込めて睨んだ。更には牙装をニコラを守るように展開し、こう言った。
「この子に何かしたら、心臓を抉りとるわよ…ッ！」
「ミア…」
「…」
自分が満身創痍となってでも、弟は守る。弟に手を出したら殺す。そこには確かな姉弟としての絆があった。ディアナが失ったものを持っている彼女らに、ディアナは手が出せなかった。
だって――それを引き裂かれる痛みは、ディアナも知っているから。
「…その弟、暴走が始まってるわ。早く血涙を飲ませて、安静にしてあげなさい」
「え…なんで…？」
いきなり弟の心配をしてくるディアナに、困惑するミア。
たしかに、弟のニコラには暴走の兆候と思わしき跡が顔に出始めている。このままでは暴走して堕鬼になることだろう。
しかし、なぜこちらの心配をしてくる？先程まで命を狙ってたの

に。
　ミアの疑問は、それに尽きた。
「……たった一人の家族なんでしょ？大切にしてやりなさい」
「…！」
　その言葉に、どんな意味が含まれているかは明確にわからないが、ミアは何となく、その言葉の意味を理解していた。
「あんたもよ。今は守られて、大きくなったら姉を守ってやりなさい」
「言われなくてもなるよ。絶対にね」
　対してニコラは敵意を剥き出しにしたままであった。しかし、姉を守るという心は本物であることはわかった。
　ディアナはその姉弟を、攻撃もせずに見送った。見せつけられた姉弟の絆に、ディアナは何も出来なかった。

「……我ながら何をやってるんだか。よりにもよって…思い出すなんて」
「…ディアナ様？」
「思い出しただけよ。柄にもなく、昔の……姉のことをね」
「そう…ですか」
　不意に、幸せだったあの日々を思い出してしまった。吸血鬼も、バケモノもいない平穏の日々。まだ幼かったけれど、明確に覚えている私の宝。
　戦意喪失、とはこのことを言うのだろう。あの姉弟を、殺す気にはなれなかった。姉弟ということを知っていなければ殺せたかもしれないが。
「…寄り添う、ね」
「…？」
「姉もそんなことを言っていたな、と思っただけよ」
　だめだ。この女を直視できない。さっきまではっきり見えていたのに、この人が、『姉』に見えてしまう。これもさっきのフラッシュバックの影響か。
　さっきまでそんなこと無かったのに。いきなり、どうして。

「…ダメ、今日はもう休みましょう」
「仰せのままに…」
その日は、最後まで頭痛が止まらなかった。